

保育者の資質形成を促す園内研修の在り方

得能 公子

(宝塚市立長尾南幼稚園)

1 はじめに

2001年の「幼児教育の充実のために～幼児教育振興プログラム」の中で「これからの幼児教育においては、主体的な判断力や省察、状況に応じて保育を具体的に構築し実践する力、幼児の内面理解から保育を創造する実践志向が求められ、こうした観点から研修内容の充実を図ることが重要である」と保育者の資質の向上を求める研修の在り方を問われる一文が、明記されている。保育者として急速な時代の変化に対応できる専門的な知識を身につけ、地域社会や保護者のニーズに応えることのできる質の高い保育技術の習得を保育者一人一人のライフステージに合わせて行なっていく園内研修の在り方が、今問われていると考える。

2 研究目的

従来の園内研修では、ベテランの保育者と園長・副園長が研究主題・研究方法・実践など概要を企画し、若い保育者はともするとデータ処理や決められた部分の実践記録を書くといったルーティン作業的な形でしか研究に関われないこともあった。その結果、研究と日々の自分の保育実践につながりを見いだせず、園内研修の中でも『意見が言い難い・悩みや課題が出し辛い・研究の中身が理解できない・先輩の先生に任せておこう』といった受け身の態度で研修に臨まざるおえないケースもでてくることとなった。

保育者一人一人が、常に自分の保育を系統づけて捉え、課題意識をもち、保育の方向性を見定めて、明日への保育に生かす試みを行なっていくことは必須である。そこで、各々が自らを見つめ、自分らしさを発揮し資質の向上を目指していくことのできる園内研修の在り方を探っていくこととした。以下は、平成13・14・15年の3年間の兵庫県宝塚市立長尾南幼稚園のささやかな研修の試みではあるが、これからの時代の新たな研修方法の一思索となるのではと考え進めてみることにした。

3 研究の方法

研究主題「よさと可能性を生かし、共に育ち合う幼児の育成」に向かって、各保育者がそれぞれにテーマをもち自主的に創意工夫して研究を進めていった。

まず、研究を推進するにあたって、全員で主題設定について共通理解を図る。

次に、園の研究主題に向かって、各自が自己研究主題、研究方法をもち、実践を進めていくこととする。

それぞれの側面から、各自の研究を公開保育や記録の検討などを通して検証し、主題に向かって研究を充実させる。

4 結果と考察

(自己研究主題および研究方法と実践結果)

事例1 保育者A(経験年数:4年目)

主題 「幼児がもっとやってみたいと意欲をかきたてる物的環境を考える」

方法・ 幼児がどのように環境と関わっていったか物的環境ノートを作成することによって、そのものの持つ特性を探る。

・ 物的環境を洗い出し、教育的意義を考慮の上環境の再構成をしていく足がかりとする。

結果 物的環境がもっている可能性を下表にまとめた。幼児の遊んでいる姿から特性や性質を考えたものである。

種類	物的環境	特性や性質	遊んでいる姿	育つ力	教師の援助
素材	紙粘土	可塑性	丸める 伸ばす	創造性	見立て 具体化

各論 自然物とは、感性・四季の移り変わり・生命の神秘・科学性の芽生えを育むものである。

各論の中で保育者Aは、自分の組の子どもにとって素材とは・・・道具とは・・・リサイクル素材とは・・・遊具とは・・・と保育で取り上げた物的環境のほとんどに定義を打ち出していった。

Aの総合考察の抜粋

物的環境がもつ教育的価値を考慮して保育に今後は、取り入れていきたい。また、同じ傾向のものに偏らず幅広い使い方が、子どもの遊びに膨らみを

もたせることが分かった。4歳児・5歳児と適時性を考え準備する必要がある。同年令・同時期の幼児であっても幼児一人一人によって教育的価値が違っても分かった。幼児が生き生きと遊ぶことができる素材になるものはないかと、日々アンテナを張り保育者自身の感性を磨いておくことが大切である。

Aは、保育経験2年目から個人研究を始めた。当初は何に視点を置いて研究を進めればいいのか、先の見通しが立たない不安から、園内研修で度々涙する場面もあった。わからないながらも、がむしゃらに保育後物的環境ノートを書き続けていった。次第に系統性を物的環境の中に見いだしてきて、A4用紙3枚にわたる前述の表を作成していった。継続的で毎日の保育に裏打ちされた地道な実践研究となった。

事例2 保育者B（経験年数18年目）

主題 「日々、自己表現や自己抑制している幼児の成長を捉え、保育者と幼児の関係性の在り方を考える」

—— なぜ、その幼児が気になるのか保育者自身の指向性を探る ——

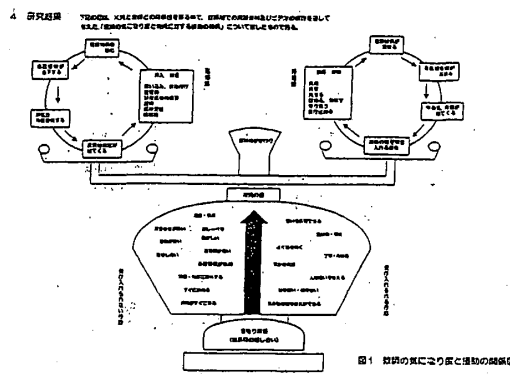
方法・ 保育者自身の指向性を明確にするため、学級の中で教師がもっとも気になる幼児に視点をあてる。

- ・ ビデオなどの視聴覚機器を利用し、保育者と幼児の関係性を客観的に見ていく。
- ・ 実践事例をもとに、幼児に対して多面的な捉えができるよう、保育カンファレンスを行なう。
- ・ 話し合いをもとに、「保育者の気になり度一覧図」を作成する。
- ・ 「気になり度一覧図」から保育者自身の指向性を省察する。

結果 気になるK児と保育者Bとの関係性を探る中で、保育者間での実践資料・ビデオの検討を通して考えた「保育者の気になり度と幼児に対する援助の関係」の図を作成した。

保育者にとって気になる幼児とは、「その行動は受け入れられない」と、保育者が感じる行動を多くとりがちな幼児であると言える。保育者Bは、この「受け入れられる行動」と「受け入れられない行動」を天秤に例え、その針を意識的に「受け入れられる」という

方向に揺らせていくことが大切であると捉えた。



Bの総合考察の抜粋

保育者が、幼児の見せる行動に対して読み取る角度を変えていくためには、保育者自身が心の中にある幼児のこの行動は「受け入れられる」「受け入れられない」といった、保育者自身の指向性を意識していくことが大切である。幼児の行動に対する「気になり度」を意識し広く受けとめられるように日々研修を続け保育者の専門性を高めていくことで、幼児だけではなく保育者も共に育ち合うことになる。

経験年数が18年ともなると、子ども理解を追求していく中で、保育者自身の生き様、度量の広さを振り返り、自身の自己変革や意識改革の重要性を説く研修内容に取り組むことができることがわかった。

5 おわりに

今回の園内研修では、研究体制を支持系統縦一本型からカンファレンス型へ、また各保育者がライフステージに見合った無理のないステップの研修内容に取り組むことができた。研究会を終えた時、一人一人の保育者が園の中で、かけがえのない存在として自信をもち前向きに保育していこうとする姿を見ることができた。しかし、個人研究を進めていくためには表には見えないがそれぞれの立場での配慮や心得が必要であった。園長は、明日への確かな展望を見定め、イメージの構築、新しい試みを行う勇気と決断が要求された。

副園長は、実現遂行のためのプランニング、各担任の研究の推進状況の把握や相談を必要とされた。

担任は、個人研究に耐えるだけの意欲をもち、途中で放り出さない責任が要求された。個性あふれる保育者同士が、コミュニケーションを図りつつ、保育者集団の一員として協働関係を構築してしていくよう、今後も日々の保育に邁進していきたいと考える。